

本号のテーマ：「佐久市青少年健全育成市民集会に参加して」

令和3年11月24日、愛知県の中学校で中学3年生が同級生にナイフで刺され死亡するという事件が起きました。刺したナイフが肝臓を貫通するほどの強い殺意があり、子どもたちの大切な学びの場である学校内で起きたことに大きな衝撃を受けました。新聞等の報道によると、学校のいじめに関するアンケート調査では、加害生徒からいじめの報告があったとのこと。その後学校の対応があり、担任の先生の問いかけに「大丈夫です。」と答えた加害生徒。学校としては、いじめは解決したと考えたけれど、3年生のクラス替えでは別々のクラスにするという配慮をしたとのことでした。二人は同じ小学校の出身で、被害生徒は加害生徒に生徒会役員選挙の応援演説を頼むほどの仲でした。依頼されたことが加害生徒の動機の一つになったようですが、いじめを受けていたと訴えた加害生徒の心の中にあつたものにもっと寄り添うことができれば、この事件は起きなかつただろうと思うと、一層切なさがこみ上げてきます。被害生徒は、リーダー的存在で多くの人から慕われていたとのこと。大切な命を奪われた本人やご両親のことを思うと言葉になりません。加害生徒は、「いけないことをした。」と取り調べに対して答えているそうですが、どうして思い留まることができなかつたのでしょうか。同じ人間として人の命を奪うことの残忍さ、恐ろしさ、大切な我が子を失った家族の思い、事件を起こしたことによる自分の家族の今後の生活、考えて欲しかったです。

思春期を迎えた中学生には複雑な思いがあることを改めて感じながら、事件の3日後に行われた佐久市青少年健全育成市民集会に初めて参加しました。感動したことが二つあります。一つ目は、しっかりと自分の考えを持った中学生の意見発表でした。市内の公立・私立あわせて8校から1名ずつの代表者が次のような題名の意見発表をしてくれました。

- | | |
|---------------------|----------------|
| ☆「一期一会を大切に」 | ☆「高校生にバイトは必要か」 |
| ☆「私達のための校則」 | ☆「その一人を大切に」 |
| ☆「祖母を失って、考えさせられたこと」 | ☆「地球温暖化」 |
| ☆「『住みたい未来の望月』を考える」 | ☆「恥から始まる自分探し」 |

自分自身の今までを振り返り、これからの自分の生き方について考えたこと、家族や友だちが改めて大切な存在であると気づいたこと、勉強との両立を図りアルバイトをすることの意義について考えたこと、見方を変えたら、学校の校則が弱い人の味方になっていることに気づいたこと、自分が住む自然豊かな地域の良さや未来への思い、世界的な課題である地球温暖化への自分が取り組みたい対応等について真剣に語る姿に心打たれました。中学生らしい純真な考え、これからも大切に持ち続けて欲しいです。この青少年健全育成市民集会での意見発表の経験は、人生の中の節目、大きなステップとなり、これからの佐久市の未来を支えてくれる力になるだろうと思いました。



二つ目の感動は、夜回り先生こと水谷 修先生の講演です。演題は「さらば、悲しみの青春 ～夜回り先生 命の授業～」。非行に走る子どもたちを救いたい、熱く語る水谷先生。1時間半のお話で心を震わせ聞き入りました。感動の連続でした。水谷先生は、現在花園大学客員教授、上智大学講師をされていますが、前は高校の先生でした。横浜の進学校の社会科の先生をしていましたが、友人とのけんかがきっかけで定時制の先生になりました。定時制の先生をしていた友人が定時制で学ぶ子どもたちのあまりの非行ぶりを嘆き、「生徒たちは腐っている。」といったことに激怒し、「生徒を腐っているという先生は辞めろよ。俺が定時制の先生になる。」と宣言し、自ら定時制高校への異動を希望されました。

非行・犯罪、薬物乱用、自殺、いじめ、不純異性行為、不登校、ひきこもり等様々な問題を抱える生徒たち。生徒との人間関係、信頼関係を築くために生徒の居場所である夜の街に行き、深夜から朝までパトロールをする水谷先生。「人のために何かをしてごらん。」「人は誰かを幸せに、笑顔にするために生きているのだよ。」と粘り強く語り続ける水谷先生。水谷先生は、「一人の子も死なせない。」という信念のもと、高校の先生を辞め、2004年に水谷青少年研究所を設立されました。水谷先生のホームページを見ると、研究所を設立してから始めの8年間で80万通のメール相談を受け、関わった子どもたちが26万人に達していました。横浜だけではなく全国の心の病を持つ子どもたちのために奔走し、佐久市の繁華街でも夜のパトロールをした経験があるそうです。



私は、以前テレビで水谷先生の夜の見回りについての番組を見たことがあります。当時水谷先生が癌を患い、医師から余命があまりないことを宣告されていると話されたことを記憶しています。すごい先生だなと感動するとともに、なぜ大病をしている体を酷使してまで夜の見回りをするのだろうと思い続けていました。今年度佐久市青少年健全育成市民集会に水谷先生が講演されると知り、是非ともお話をお聞きしたいと思っていました。水谷先生は、凜とした姿で講演されました。その姿からは、大病を患ったことを感じさせない力強さがありましたが、お体には包丁で刺された傷があり、何度も手術をされ、ボロボロになっているのだろうと思いました。

講演の中で、今も心に強く残っているのは最後に話されたIさんのことです。Iさんは恵まれた家庭に育ち、お姉さんと同じように有名私立中学校の受験に挑みました。お姉さんとは違い、有名中学校の受験に失敗し、滑り止めとして考えていた中学校の受験にも失敗しました。そのとき母親からかけられた言葉「あんな中学校落ちるなんて、あなた誰の子。」、この言葉によってIさんの人生は大きく変わり、家出、薬物依存、不純異性行為等非行の道に走り、遂にはエイズに感染してしまいました。水谷先生が病室を訪れてくれることを



生きる励みとし、病と闘いながら「私のことを講演で多くの人に話して。」と自分と同じ過ちを繰り返さないことを願い、短い一生を終えました。水谷先生は、Iさんとの約束を守り、講演で必ずIさんのことを話し続けているそうです。Iさんの人生を大きく変えてしまった母親の言葉。水谷先生は、「優しい言葉をかけてください。自分は愛されていると実感することがとても大切なのです。」と語られました。そして、「夜の見回りはしなくても、朝出会った子どもたちがもし下を向いて歩いていたら、声をかけなくても気に留めてください。みなさん一人ひとり、何ができるか考えてください。」とも語られました。水谷先生の子どもたちを思い、情熱を

捧げる姿に感動し、自分に何ができるか考え、自分にできることをしたいと思いました。街で出会った子どもたちに「おはよう」「こんにちは」と声をかけることを始めました。小さなことだけれども、子どもたちとつながっていきたいと思っています。